

# 誇れる故郷のことなどの、あれこれ

昭島市 佐藤光子（東城町二出身）

六月十日、高田高女・北城高校同窓会東京支部の総会がアルカディア市ヶ谷で行なわれました。

当日の講演は、四十五回卒業の高田の童話作家杉みき子氏の『高田が呉れた物語』でした。

幼い頃から本を読むのが好きだったこと、自分で書いたらもっと楽しいのではないかと思つて書き始められたそうです。

子供の頃、沢山の喜びに出会い、書く題材がいっぱいあった。これは高田という故郷から受けた恩恵である、とおっしゃるのです。

昨今、若者や子供が悲しい事件を起こすが、幼い頃幸せだったら、そんなことをしないのではないかと。

『児童文学は、子供の頃に豊かな体験のあった人が書ける』児童話とはこうい

うもの、という型にはまらずに、誰も書かないものを書くこと』だと、児童文学者で後進の指導に熱心だった関英雄氏に、教えられたそうです。（ああ、それなら自分の事、自分が体験したことを書けばいいのだ！）と、杉氏は納得されたという。

杉氏自身を感じられた子供の頃の幸せとは、特別なものではない。冬の夜、お父さんと炬燵で読書している時、その静かさに、「あ、雪降っているな」と、お父さんがぼつりと呟いた、それを耳にした時などだったということです。

そういうささやかなことに幸せを感じられる杉氏です。杉作品に、しみじみとした深い情感があるのは、そういうところに所以しているのだと、その話を聴いて納得出来たのです。

『生涯高田に住んでいて、他所を知ら

ない視野の狭い「井の中の蛙」でも、真つ直ぐ上を見上げれば、高い空があることを知っている、下を見て思索する深い心がある。心の高さ広さを追求することが出来るので、井の中の狭さを気にしないで済む。幼い頃の記憶がタイムマシンとなつて心に内蔵しているの、思いは尽きない。郷土の豊かな自然―青田川の周辺への思いなど、亡くなった人達のもっているはずの話を、自分が通訳する気持ちで書いている。それを読んだ人が色々受け取つてくれ、返してくれるお蔭―つまり、強力な合作者に恵まれているお蔭で、書き続けている』

という内容でした。地元では講演を聴く機会はあるということですが、私は今回初めて杉氏の講演を聴いたのです。とても感動したので、ちよつとここに書かせていただきました。

杉氏の作品は、過去の小・中の国語の教科書に一番多く採用されております。故郷が最も誇る童話作家なのです。

その日の夕方は、「Jネット東京サロン」の月一回の楽しい集まりが渋谷である日でした。

東京在住の北城の同窓生の中には、Jネットの会員になっている人がかなり居り、同窓会の二次会のような形で、そこから参加する人が十余人いました。



同窓会風景と佐藤光子さん（右上）

東京の郊外に住む私は、夜の集まりには殆ど出ないのですが、都心に出たついでということ、何年ぶりの参加でした。

初対面でも、出身地（例えば明治村など、と）書いた名札をきっかけに、話をしているうちに、タイムスリップして、あの人のこと、あの頃のことなどに話が繋がりが、話はとどまることなく展開されるのです。

今回、特に印象深かったことは、北城高校きつての美壮年（あ、こんな言葉は無いかもしれませんが）の、数学の中村先生（短期間で転出され、がっかりした

ファンが多かったのです。この日、何故引越されたのか訊いたところ、四人のお子さんの教育のために東京転勤をされたと分かりました。に、面影のある方がおられたのです。勇気のある友人が、「もしかして中村先生の……」と声を掛け、やっぱり「子息だったということが分かりました。当時の先生の人気についてあれこれ思い出が語られ、「私の学級担任だったのよ」と自慢する先輩もいて、話に花が咲いたのです。さらに、和久井会長がその方のことを、「この人のおかげで、日本の新幹線が走った」と、紹介。やはり、中村先生の『孟父の？遷』に、狂いはなかった。そういう先見の明のある先生でもあったかと、認識されたのでした。

今回、お若い方が参加されたのも印象的でした。その中のお一人、私の隣にいらつしやった山田さん。お母さんが板倉のお寺のご出身。名古屋に嫁がれたけれど、その方を板倉でお産をされたということで、ご当人は産後わずか二か月程板倉にいたというだけのご縁。

お母さんがJネットの名古屋支部の会員なので、東京に住むその息子さんに、「東京のJネットサロンに出てくらんなさい」と、勧められたので参加した、という方。高校まで名古屋で過ごし、その後アメリカに十年間在住して帰ったばかり

りという二十代の青年。今年の五月に初めてお母さんの故郷を訪ね、高田公園を回り、その縁に大変感動したとのこと。

こういう方が、私たちの故郷を自慢に思ってくださいることは、ありがたいことです。

コンピューター関係のお仕事とかで、時代の先端を行くような方なのに、話を聞いていても、あつたかくて純朴な感じ。間違いない板倉のDNAの感じられる青年だったことは、嬉しいことでした。

Jネットのホーム・ページに余り動きがなくて寂しいと思っていた者として、今後この方の協力で更新され、上越の情報を見ることが出来るのでは……と、楽しみにしています。

人の関係が稀薄になつている昨今ですが、東京やその近辺にお住まいでしたら、共通の風土の中で育つた人との交流の場が、渋谷にあります。是非、第二水曜日の五時半、Jネットサロンに参加されることを、お勧め致します。

会場を設定していただき、銘酒や（そうそう、この日は遠路、潮来から町田さんが「あやめ」を下げてきてくださいました）たくさん品の品々を用意して下さる事務所の裏方さんのご苦勞に、心からお礼申し上げます。また、話を通して、思いがけなく若い頃の自分に出会えたりし

て、楽しい時間をいただきました皆様  
に、感謝致しております。



ある日の東京サロンのスナップ